

平成 30 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる  
「共同利用型」の個人による研究 研究報告書

2019 年 4 月 30 日現在

研究課題名	戦時経済下のソ連における市場メカニズムの機能：第二次大戦期のコルホーズ市場	
申請者	氏名	所属機関・職
	日臺 健雄	和光大学経済経営学部・准教授

### 研究成果の概要

申請者は、計画経済化が全面的に進行する 1930 年代のソ連経済においても、「コルホーズ市場」を中心に市場メカニズムが広範に機能していたことを、これまでの研究で示してきた（たとえば『ロシア革命とソ連の世紀 第 2 巻 スターリニズムという文明』第 2 章「農業集団化：コルホーズ体制下の農民と市場」pp. 65-90, 岩波書店, 2017 年 7 月）。その延長上において、平時よりも国家による統制色が強まる戦時時期に、計画経済体制下のソ連において市場メカニズムの機能はいかなる変容をみせたのであろうか。本研究の中心的な問いはここにある。

戦時時期の経済活動において国家による統制が強まり市場メカニズムの機能が消極化していくという点については、日本経済史分野における先行研究の蓄積がある。たとえば加瀬和俊氏は、戦時時期の食糧統制政策を対象として、統制政策の浸透度が品目の素材的性格によって制約を受けたこと、食糧品は生産者が消費者としての性格も備えることから自家消費量と外部への供給量がトレード・オフの関係にあったこと、公定価格制度の存在にもかかわらず軍・軍需工業・一般消費者の産地買付によって事実上価格メカニズムが機能したことを明らかにした上で、合法・非合法にまたがる自由需要と自由販売が食糧供給の全体に浸透させた商品経済の連関を示した。

上記で示された日本経済史分野における戦時経済研究の動向を参照しつつ、計画経済体制下のソ連における戦時時期の市場メカニズムの機能について (A) 計画当局による食糧に対する統制政策の品目別の実態、(B) 計画当局による価格インセンティブ活用の認識とそのコルホーズ市場への適用の政策的 content、(C) コルホーズ市場での取引の品目・数量・価格の動向、(D) コルホーズ農民による自家消費と市場への供給の内容、以上の 4 点を中心に研究を進めた。

### 主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）

- ・【図書（分担執筆）】『アジア動向年報 2018』（担当範囲「ロシアのアジア政策—北朝鮮核問題で中国と協調—」（pp. 25-42）, JETRO アジア経済研究所, 2018 年 5 月）
- ・【翻訳】コルニーロフ, ゲンナジー「20 世紀ロシア農村の近代化」（『三田學會雑誌』111(3), pp. 95-110, 2018 年 10 月）
- ・【学会発表討論者】[招待有り]溝端佐登史氏による報告「中国と東欧の企業所有構造と経営者交代」への討論者（一橋大学経済研究所・京都大学経済研究所共同利用共同研究拠点共催「新興市場の比較政治経済分析：中国・ロシア・東欧」東京ワークショップ, 2019 年 3 月 24 日）

### 当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

- ・2019 年度科学研究費：基盤研究 (C) への応募課題「戦時時期の計画経済における市場メカニズムの機能：第 2 次大戦期ソ連のコルホーズ市場」
- ・2019 年度和光大学科研費支援事業への応募課題「戦時時期の計画経済における市場メカニズムの機能：第 2 次大戦期ソ連のコルホーズ市場」
- ・村田学術振興財団：研究者海外派遣援助への応募課題「Russia's State Capitalism under Putin」

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。